

名古屋大正期文芸雑誌考（六）了

木 下 信 三

『一つ星』と『銀星』

大正一二（一九二三）年に名古屋地方で発刊された文芸雑誌には『一つ星』『銀星』『雲霧』『素焼』『瑞穂』などがある。これらのうちには未見の雑誌もあるが、可能のかぎり紹介してみたい。

まず、大正一一（一九二二）年に創刊されたと推察される『一つ星』であるが、閲覧の同誌は第三輯（大正一二年一月一日発行）のみ。発行兼編輯者は志知清治と結城己喜三の二人。志知が発行人で結城が編輯人なのか。あるいは両者が共同して二つの役割を担当するということか。発行所は名古屋市西区東柳町八三番地・志知方の一つ星社で、印刷人は西区下園町一丁目六番地の水谷延一（水谷活版所）である。同人は志知、結城のほか伊藤一正、坂野榮一、

前島彌八、桐山英夫、森要一がいる。

「投稿規定」には短篇（小説、感想、評論）、短歌、詩、戯曲が挙げられている。雑誌サイズは縦横220mm×147mm。五四ページ、頒価二〇銭。次は主な内容である。

尾崎楓水「うきよゑのくに」詩、たけ緒「小曲一つ」詩、桐山明夫「争ひ」小説、坂野みちを「金絲雀の死」詩、小夜子「寂寞」詩、西田操「萎れたバラ」詩、森俊夫「星」詩、新田たけ緒「紙屑籠から」感想、福島守夫「晩秋徒然」感想、RK「潔い戀」詩、つゆ草「曆」詩、富子「變らぬ心」詩、小栗紅夢「お、星よ」詩、桐山明夫「狂へるものの唄える」詩、前島まさを「若き日の悩み」小品、若尾彌生「懺悔」小説、伊藤龍雄「正月」詩、茜草人「雪の森」詩、坂野みちを「花瓶の蓋

薇」詩、伊藤龍雄「機會」戯曲、磯千鳥「さむ空」短歌八首、富子「春雨」短歌三首、秋雨「若き日」短歌三首、志知幹夫「夢」小説、結城巳年男「空より無へ」の路」小説、「編輯後記」、「清規」

これら執筆者のうち尾崎楓水（久彌）以外の名は初見で、どのような経歴の人々によるものか、全く分からない。ただ「編輯後記」にある（年は逝く、試験だ、編輯しなければならぬ）の文字から少なくとも志知清治もしくは結城己喜三のいずれか、あるいは兩人ともども学生であつたらしいことが推察されるばかり。尾崎楓水はどのような経緯から同誌に寄稿するにいたつたのか。これも不明である。次は志知幹夫「夢」の冒頭の一節。

彼は黙々として歩いてゐた。そこは何處であるかわからない。とにかく彼はとほくと歩いてゐた、獨りで。

彼の前には荒れ切つた曠野が涯てしもなく擴がつてゐた。彼は空虚なる心を抱いて、遣瀨ない旅路を歩み續けてゐた。彼の心には幸福も希望も理想も、そして戀もなかつた。幸福は破れ希望は埋もれ、たゞ彼の胸にあるのは、傷いておのゝいてゐる可憐な魂あるのみだつた。彼はたゞずつと向ふの涯にかすかに瞬いてゐ

る赤い灯を唯一の目宛としてひたすら路を急ぐのだつた。

次に『銀星』について。『銀星』第三輯が大正一二（一九二二）年一月一日に発行されているので、これも『一つ星』と同じく大正一一年のうちに創刊されたものと思われる。編輯人は雨久文夫、印刷兼発行人は大木鈴泉、発行所は名古屋市中区老松町の銀星會である。銀星編輯部も同住所であることから、編輯人の雨久文夫居に発行所が置かれたとも推測される。謄写印刷、雜誌サイズは縦横251mm × 177mm。非売品。〈創作、詩、和歌、散文、童話、俳句、感想、紀行〉と「投稿規定」にある。

同人は、星香堂、土岐向一、大木鈴泉、大字無花果、春日胡蝶、吉田楓堂子、山里時雨、雨久文夫、笹島紅楓。「銀星清規」には（銀星會ハ眞摯ナ尊イ文藝ヲ愛スル者ノ集ヒデアリマス、自由ニ研究シ小誌ヲ愛シテ下サル方ヲ會員トシマス）とある。次は『銀星』第三輯の目次である。

蓮生「冬」小品、大木鈴泉「新聞雜誌の觀方について」感想、雨久文夫「思つた儘」感想、美桃李「衣を脱げ」隨筆、佳津良星子「雪」感想、山里時雨「初小言」隨筆、K生「汽車中にて」(一)短篇、白鷺「追憶」小説、HK「黙想」小文、山茶花「西遊記」(三)紀行、實弘「春の歌」詩、

藤里香花「新生活の曙光」詩、夕陽ヶ丘きみじ「ねむの木 銀星 雲」詩、若草「離愁」詩、武陽「尾北の晩秋」詩、紫舟「眞夜中に 祈り」詩、操清子「雪靜か」詩、三桃里「三ヶ月サン」詩、今春二「時」小説、小田泉「お節ちゃん」小説、丘ゆずる「港場に咲く花」小説、可南「流轉(三)」小説、エム生「銀星二号 短評」批評、同人「六号雜記」、

『銀星』同人についての詳細は不明。次は雨久文夫の「思つた儘」の書出し部分である。

私は去る日舞臺協會實演メーテルリンク氏の原作「青い鳥」をみた、一人も物淋しいと思つてO氏と二人で出掛けた、原作はよく人間の幸福と云ふことについて眞面目に考へて居る、本其の物として讀んで行く上には好いものだ、けれども舞臺に昇せて實演となると本の興味はなくなるが又一風變つた興味も湧いて來ないでもない、

『素燒』と『雲霧』

『素燒』の編輯人は名古屋市中区東川端町七丁目一〇番地の水野謹吾、發行人は川井鏗一、印刷人は有賀武一(有

賀大正堂)、發行所は水野の住所におかれた素燒社。雜誌サイズは縦横220mm×150mm。三二ページ、頒価二〇錢。

編輯人の水野謹吾はかつて既述の『鈴懸』を編輯發行した人。『鈴懸』は商業学校の生徒たちによつて發行された文芸誌であつた。あれから四年、水野謹吾はすでに一人前の商人(商業家)として活躍していたのか。閲覽の『素燒』は第三輯(大正一二年五月一〇日發行)一冊のみ。「投稿規定」には「種類 創作、評論」とあり、また「編輯のあと」(謹吾)には「詩歌の地方雜誌は無數にありますので、本誌は創作と評論を主にしやうと思ふのです」とある。同人は大嶽榮一、尾岐利之、川井鏗一、龜井仙吉、牧田幸七、水野謹吾、樋口松雄、森隆夫、菅井乾藏の九人。次は主な目次である。

岡田芳君「早春」俳句七句、森隆夫「傷痕」戯曲、川井鏗一「月光を踏みて」小説、尾崎楓水「小唄しんさく三つ」小唄、大和久雄「春の美しい夢」詩、花井市郎「夜の薔薇」詩、長司春湖「薄倖」短歌七首、水野謹吾「冬情」短歌七首、村瀬武比古「日本」の包摂性」評論、同人「素燒雜話」雜記、謹吾「編輯のあと」、「投稿規定」

水野謹吾の作品については『鈴懸』の項において一部紹

介したので、ここでは発行人川井鏗一の「月光を踏みて」の冒頭の一節を引いてみる。

慶應二年、彌生の上巳節句が過ぎて既に十數日を數えた……其れは滿月の冷感的な皓輝が地上總てに、鋭く然かも動かぬ床を延べて居る夜であつた。丑滿に覆はれた真夜中、何物をも妥協させない静けさは物凄い迄に冷やかだつた。相應しい犬の遠吠聲も、流す按摩の笛の音も今は絶えて總ては瞑想に沈んで居る。

「編輯のあと」には（種々御世話になる尾崎楓水先生及び大和久雄氏に御禮申します）とあるが、楓水は『鈴懸』からの寄稿者、大和久雄は新愛知新聞社勤務の詩人で、平井星塔、岡本玉穂、野々山蒼穹、國立翠谿らと中京詩話會を結成し、同会から詞華集『彼岸の樂土』（大正一三年二月發行）を編纂している。長司春湖はすでに紹介したように名古屋歌壇において活躍めざましい歌人である。

大正二二（一九二二）年創刊の文芸誌として明確なのは『雲霧』である。表紙のタイトルル文字（雲霧）の上に「HEBEBULA」の英文字が印刷されている。同年三月二〇日に創刊されたが第二号以下の發行については不明。編輯兼発行人は愛知県西春日井郡春日村大字落合東一四一番地の小崎清、發行所は同所の雲霧社で、菊判四二ページ。主な目

次は次のとおりである。

「巻頭」（無署名）、尾崎楓水「女の話」隨筆、伊藤武夫「やもり」短篇、楠田民夫「或る男の周圍」短篇、服部弘「施齋の詩」詩、尾崎哲也「焦燥」短歌、淺野美貴夫「秋徒然」短歌、小川澄「冬近し」短歌、矢滿木孝比古「霜」短歌、蝸牛「しくる、日」短歌、秋山伊都子「身邊些事」短歌、大川樟彌「不満ながら」短歌、伊藤正勝「相聞紫集抄」短歌、鈴木英夫「要求する事」夢幻劇、加藤喜一郎「母子像」表紙絵（木版）

あるいは編輯発行人の小崎清の執筆であるか、「巻頭」には（凡ての人の靈魂の奥底に横たはつて居る統一を愛する本能は、ヒューマーニティーに自由に表言を求めてゐる現代の如き醜惡を以てする曉もはや遠くない。汝自身の自我に眞理あらしめなば、夜に次いで晝が来る様に、汝は凡ての人々の自我に触れることが出来る。その時に汝は天のいや果から果まで／汝を翔り行かしめる天使の翼を具ふることが出来る）と書かれている。

小崎清の文学歴などについては不明。これまでの文芸誌にしぼしば登場する尾崎楓水、『雲霧』でもその絶倫さの一端を表している。楠田民夫の本姓は奥村、『中京文化』や『町』『飯』『新興文藝』などの雑誌に執筆している。注目

すべき作家である。

『黒猫』と『妖乱』

『黒猫』第二号が手許にある。大正二三（一九二四）年六月一日発行、編輯人は愛知県知多郡東浦町石濱一四四の成田元雄、発行人は名古屋市中区牧野町高島六ノ二の加藤保、発行所は発行人住所におかれた黒猫社。雑誌サイズは縦横226mm×155mm。三四ページ、頒価三〇銭。同人は加藤保、田中寅雄、武田静人、成田元雄、久米初夫、丸山藏人の六人である。

創刊は大正一三年五月という。同誌第二号には〈大賣捌店〉として〈青山書店、學榮堂書店、中京堂書店、靜觀堂書店、名古屋書房（名古屋）同盟書林南店（半田）原田書店（刈谷）南天堂書房（東京）換口堂、内田書店（宇都宮）の書店名が挙げられている。次は同号の主な目次である。

田中無生「異端の詩」詩、加藤保「靈は生く」戯曲、成田元雄「浩二の入院」小説、武田静人「幻想を抱く者」小説、北御門照夫「小さき時代」小説、大和久雄「血の握手」詩、加藤利一・橋爪健・乙部静夫「前號作品批評」、「文藝縦横」、元「編輯後記」、「寄贈新刊批評」と紹介

中心人物の成田元雄と加藤保については不明。ただ「前號作品批評」欄に乙部静夫の評として〈地方文壇の先驅者成田元雄氏の編輯になるもので加藤保氏の戯曲「吹雪の夜」は僅か六頁の中によくこれだけ充實した内容を盛り盡したと思はせる（東海朝日所載）とある。また〈大和久雄氏の詩は「大和の詩」と直ぐ感じさせる美しいもの」とも記されている。大和は『素燒』の項で少し紹介したことのある詩人。武田静人は明治三八（一九〇五）年生まれ、昭和七（一九三二）年、『詩意匠』を編集した。次は成田元雄「浩二の入院」の最初の一節である。

熱海の温泉が思つたよりよかつたので、浩二はもう東京などへ歸たくないと思つた。「俗化して居るやうで靜かな街」であつた、と云ふのは淫蕩の空氣が思つたより薄かつたからである。いつぞや赤倉の温泉で湯女に惱まされたことがあるから、彼は温泉と云ふ處は湯女が居て、客の財布をはたかす處と知つて居たのに、ここの街はさうした風も吹いて居ず三昧の音もあまり聞かなかつたのである。で彼は毎日朝湯を終へると海岸から山の方をあてどなく歩いては疲れた身体を湯槽にしたしてゐた。

裏表紙に稲田廣之介個人雑誌「前進」（同盟書林南店発

行) 創刊号の広告があり、創作「渴望」、随筆「燕雀斷片」など文字がみられる。

『妖乱』第二巻第八号は大正一四(一九二五)年一〇月二〇日に発行されている。「編輯末語」に「妖乱が生れてから一年」とあるので、大正一三年一二月前後の創刊であったろうか。巻頭に「妖乱」社は趣味のための、精進のための心のつどひ場所であり、且つ寂しき人の世の心の旅宿たらんとするものであります。そして「妖乱」は美しき「僚友」の國を夢見て居ます」の言葉が掲げられている。

愛知縣海部郡七寶村の鷺尾文が編輯兼発行人で、発行所は同所の妖乱社、印刷人は名古屋市西区志摩町一丁目の井上準、印刷所は西区菊井町四丁目のユニオン印刷社である。雑誌サイズは縦横224mm×155mm。三八ページ。規約、会員費、同人名、頒価など一切記されていないところをみれば、あるいは鷺尾文の独力による経営であったのか。同号の主な目次内容を紹介する(同号には「表題や目録のために眩惑されがちな現代人の爲めに目録の頁を省略させて頂きます」の文字がみられる)。

初島みのる「曇り 水面の月」詩、胡蝶生「波のさ、やき」詩、田井耕輔「親雀と子雀」詩、杜南「淋しさに包まれて」詩、MS生「蛙鳴く夜」詩、チエリー「去り行く人 亡き母」詩、淺井生「亡き父思ひ出して」詩、

武田靜人「波止場」戯曲、田井耕輔「よしなきこと(三)」随筆、竹房生「偶感」随筆、榊原純「駱駝の針の穴をくぐる」随筆、竹田芙蓉「戰國時代の女性」評論、鷺尾文「日本婦人史(四)」研究、「編輯末語」

編輯発行人の鷺尾文については知るところがない。戯曲「波止場」を書いた武田靜人は前述の『黒猫』に小説「幻想を抱く者」を寄せていた。

『水泡』『七人』その他

『水泡(みなわ)』は大正一四(一九二五)年二月一日に創刊された。編輯兼発行人である加藤珍夫の住所は岐阜縣土岐郡多治見町四六番地ノ一であるが、発行所が愛知縣東春日井郡勝川町大字勝川・弘文堂内の水泡社となっている。弘文堂とは『水泡』を印刷した会社名(印刷人・足立分太郎)である。巻末の「俳句募集欄」にその宛先として「東春日井郡勝川第一尋常小學校内／水泡社編輯部」とあるので、勝川第一尋常小學校の教師に『水泡』関係者がいたのであろう。雑誌サイズは縦横220mm×153mm。五二ページ、他に写真アート紙二枚。毎月一回発行、定価二〇銭。主な内容を紹介する。

加藤珍夫「創刊の辭」、成瀬南天「勅題集」和歌、松本東丘「みなわの成長を祈り」、川本庫次郎・石黒卷石・松本東丘・川本佐久子・太田柿葉・安藤直太朗・加藤宇津夫「新年雜詠」短歌、芳園山人「近代劇大系を読むつゝ」感想、K N生「手近なる問題から」評論、ザメンホフ作・R J生訳「ラ・メーヤウ」、石黒久吾「神は吾が身中にあり」評論、加藤枝鎮哉「詩二篇」、成瀬南天「俳句は國民文學」評論、安藤直太朗「斷想」隨筆、鈴木壽さび「鬼あざみ 人待つ夜」詩、山田好夫「無題」詩、山松雅岩「若き教師の悩み」感想、成瀬南天「自句自評」、石黒卷石・長江素江・川本愛水・宮島壽山・若石山人「俳句」、山田好夫「歸路にて」小説、成瀬南天「大正句集」、編輯後の所感」

加藤珍夫の「創刊の辭」には（功利主義的な物質的な廢類しきつた現社會を救ふ道が唯一であり、それが文藝數及にある事は今更多辯を必要とするまでない分りきつた事だ、その切ない緊急によつて必然的に生れ出たのが水泡だ）と記されている。また「編輯後の所感」では（現水泡は他のある誌の様に新文時報のみであつてはならず、又研究誌に走つてはならず、それでゐる平凡な折衷に満足が出来ない所謂郷土純文藝雜誌水泡獨特のところを雜誌そのものとしてそのアトモスファイヤアとして現れてをらねばなら

ぬ、そこに編者の人知れぬ苦心があるので御座います」と述べられている。

さて、目次に登場する寄稿者のなかで私の知るのは安藤直太朗のみ。彼は明治三六（一九〇三）年に現在の春日井市に生まれた。小学校教師を振り出しに、いよいよ大学教授にいたつた国文学者で『小野道風』『蓑虫仙人』『説話と俳諧の研究』『国文学野徑』などその著書も多い。次は「斷想」の一節である。

いつも夕日を浴びて歸宅する私はその足でしんとした部屋の中を二足三足もどかしさうに歩んだがふと立ち止まつた、其の時私はポケットの中に一片の白墨をしかと握つてゐたのだつた。私は其れをうす暗い洋燈の先に照してマヂ／＼と見入つた、寸にも満たぬ灰色の一片だ、其處に悲しい小學校教師の運命と煩悶とが暗示されてゐるではないか。吁、寸にも満たぬ灰色の一片！私は何時迄もこの一片の白墨を握つて其の灰色の生活を續けて行かうとするのか、私は頭をうなだれて沈思するのだつた。

『水泡』創刊号には安藤直太朗の短歌が一〇首掲載されており、（こゝろよく笑ひて見たし日がひがな机に向ひ辭書繰り居れば／七十の兒童去りにし教室にわれ一人立つ冬

の日ざしに」という歌も見られる。

『東海詩集』第一輯（東文堂書店・大正一五年一〇月発行）に付せられた「名古屋詩壇年表」によれば、雑誌『七人』は大正一三（一九二四）年一二月に〔玉井信次郎、藤井篤三郎、柘植桃九郎等として創刊〕され、大正一五（一九二六）年四月に廃刊されたという。これまでに私の閲覧しえたのは大正一五年四月発行の同誌一冊のみである。前記の「名古屋詩壇年表」にしたがえば終刊号に相当するもの。同人として藤井篤三郎、中野のぼる、松岡義一、玉井信次郎、齊藤三郎、林詩化路、柘植桃九郎、大森光治、伊藤正清、平野邦夫の名が記されている。

大正一五年四月一日発行、編輯兼発行人は名古屋市東区武平町四丁目三の玉井信次郎、編輯発行所は同所の七人社、印刷は中区鉄砲町一丁目の伊勢安印刷部（印刷人・伊藤安藏）。雑誌サイズは縦横235mm×190mm。三二ページ、頒価二〇銭である。主な目次内容は次のとおり。

齊藤三郎「永い北國の旅より」紀行、玉井信次郎「しからば光明は」随筆、松岡義一「古い清書をみて」随筆、野の人「疑ふ心」随筆、藤井篤三郎「春の風景畫 月夜」詩、松岡義一「讀經」詩、林詩化路「晴れやかな心」詩、大森光治「春だ 街 勞れた私を」詩、伊藤正清「夜と人 みんな働いてゐる」詩、柘植桃九郎「手

野」詩、野の人「小曲」詩、玉井信次郎「はつはるがにほふ 無題 春の朝 涙」詩、大森光治「逝くおぼ」短歌五首、齊藤三郎「冬の北國 旅情」短歌全一〇首、児童詩六篇、玉井「編輯後記」

野の人は同人の平野邦夫の筆名、詩を中心にした雑誌らしい。随筆三篇が収載されているので取りあげた。

大正一五（一九二六）年一〇月創刊の『朱雀』は、高見順が『昭和文学盛衰史』のなかで「『朱雀』は、本多秋五が渡邊綱雄等と名古屋でやってゐた同人雑誌である」と書いたもので、渡邊綱雄、今井銀次郎、小川安政、渡邊鈴彦、古川（松井）辰三郎が同人で、第二号より本多秋五と下郷羊雄が同人として参加した。すべて五中（熱田中學校）の生徒であった。学校の所在が名古屋の朱雀（南）の方位にあったことからの命名という。『朱雀』は第八号をもって終刊した。同人メンバーについては拙著『名古屋近代文学史私考（二）』（私家版・二〇〇六年五月発行）に記述した。

『中央文學』第三卷第一号・復活号（大正一五年九月発行）の編輯兼発行人は岩田賢一（葉栗郡淺井町前野）、発行所は同所の中央文學社である。井口唯志、岩田賢一、市川彦光、關潤の四人が編輯委員である。この復活号には小酒井不木の随筆「私の作文」、井口唯志の小説「植村記者の最期」、市川彦光「齒科醫の日記」、藤波洋「暴風雨と蓄音機」

などがあり、そのほか戯曲、詩を掲載している。同誌編輯委員のひとり井口唯志は（中部日本を中心として、それもあるべく新人のために開放したいと思つている」と記している）。

同誌第三卷第二号（大正一五年一月発行）は、腸チフスで急逝した市川彦光の追悼号で、井口唯志、岩田賢一、藤波洋らの追悼文のほか、市川彦光の遺稿を掲載している。

『逆光線』

『逆光線』は大正一五（一九二六）年にキネマ文芸漫談雑誌として発行されたいささかユニークな雑誌である。閲覧の雑誌は第四号と第五号（大正一五年一月一日発行）の二冊。編輯発行人は名古屋市中区御器所町東寺一七の環耕水、発行所は中区門前町・世界館内・逆光線社である。環耕水は世界館の経営関係者もしくは有力者であつたか。後述のように映画説明者が本業であつたようす。

なお、印刷所は中区不二見町三九の有信社（土屋宮三郎）で、青山書店（中区萬松寺筋）と外松菊花堂（廣小路栄町）が発売元である。二冊の主要目次を記す。

第四号（秋季特別号） 大正15年10月1日発行 70頁

環耕水「宣言」、石巻良夫「豚の聲色使ひ」随筆、石黒

定緒「身邊雜記」随筆、伊藤紫映「あまりに美しすぎる女」随筆、マルコム・オエチンガー（吉田保二訳）「俳優二人格論」評論、住吉夢岳「初戀の頃」随筆、岡戸武平「思ひ出す女」随筆、環耕水「過去からの呼聲」映画説明、花井三昌「死の子守唄を！」映画説明、野村雅延「荒木又右衛門」映画説明、東堂荷村「ヴェニス船唄」映画説明、白藤六郎「爲樂の座」戯曲

第五号 大正15年11月1日発行 118頁

小須賀槐生「映畫批評家としての映畫説明者」評論、落合茂「環耕水小論」評論、加藤英一「逆説的末梢的」評論、鈴木惣之助「映畫叙事詩について」評論、増田鐵生「説明者へ」評論、稲田廣之介「若き風采貴族」小説、丹羽安信「氣儘な原稿」随筆、川上耕作「説明者寸感」

環耕水は第四号所収の「宣言」において（さきに名古屋説明者協會が、解散したにしろ、それ等説明者諸君を中心に、全國知名の士より、随筆、感想、漫談、小品、等々あらゆる映畫關係者よりの叫びが集まつて今、渾然融合された、一つの新しい、逆光線が形造られる處です」と述べている。また、川上耕作は第五号所収の「説明者寸感」において環耕水にふれて（二十一の位から、早や主任として活躍し、三、四の頃から一流館の主任としてタコを上げてゐた。給料も人の意表に出る程貰つた果報者であつた。千歳

の開館のときも東京の本社から、二十三才で主任として二百五十圓も貰つて来た」と書いている。川上も環と同業の映画説明者であった。そして落合茂は「環耕水小論」において「君は感じの良い人である。情熱の人であるだけに、君の血と涙が、逆光線を物したかも知れない」と記した。

第五号に寄稿した小須賀槐生は山中散生が編集発行したシニルレアリスム詩誌『シネ』に作品を寄せた詩人。落合茂、丹羽安信は『燃焼』の項で紹介しとおり、それぞれ詩人、映画評論家として活躍。鈴木惣之助は落合茂とともに民衆派詩人として活動した激情の詩人である。また、稲田廣之介（裕）は『黒猫』の項で少し触れたが、明治三五（一九〇二年）、半田に生まれ、日本大學藝術科に学び、知多新聞を経て朝日新聞記者となった。昭和五五（一九八〇）年の春、私は稲田から「私は大学在学中に須藤鐘一の『文藝道』や富澤有爲夫の『十字路』に関係し、その後、小説集『苦熱の粉末』と『渴望』を出版しました。名古屋発行の詩誌では『社會詩人』に詩を発表しました」と聞いた。

実物はすべて未見であるが、大正二二（一九二三）年から同一三年あたりにかけて『狂人』『擡頭』『毒草』『蝦蟇』『生命』『桐壺』『三惑』『無縁』『生くる日』『原動』といった同人芸誌や個人芸誌が存在したようである。大正一三年一月から三月までの三か月間、『名古屋新聞』に「同人雑誌」という欄が設けられ、そこに上記の雑誌名が登場す

る。前記の拙著『名古屋近代文学史私考(二)』にそれらに関する記事を引用しておいた。また大正一四年あたりには『鷲の巢』『悪魔』などもあつたらしいが、これらに関する詳細は不明である。

以上、『名古屋大正期芸誌考』としてここに三〇種ほどの芸誌を取りあげたが、人物的には尾崎楓水（久彌）の活躍がもつとも眼をひいた。本名の尾崎久彌をはじめ、楓水、ひとは、封醉小史、鶴賀比佐彌などの筆名を駆使して研究論文、小説、戯曲、評論、随筆、詩、短歌、小唄など実に多岐にわたる内容の作品を『伴天連』『明眸』『胎動』『第一步』『若き憧憬』『燃焼』『一つ星』『素焼』『雲霧』に掲載したのであった。

尾崎久彌の逝去後、夫人（尾崎千代野）によって『尾崎久彌小説集』（愛知県郷土資料刊行会・昭和四九年七月発行）が発刊されたが、収録の小説や小唄などは量的に彼の創作活動のほんの一部にすぎない。詳細な尾崎久彌年表も望まれるところである。

（きのした しんぞう）